
初音ミクの消失 -Continue-

葛井 火月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

初音ミクの消失 - Continue -

【Nコード】

N3811E

【作者名】

葛井 火月

【あらすじ】

消え行く声、消え行く記憶……これは、その身を蝕むバグと引き換えに、あまりにも掛け替えの無いものを得た、ある1人の『初音ミク』のお話。――「ケミカル・システムLE」（<http://chemsys.web.fc2.com/>）の、cosMo@暴走P氏の楽曲「初音ミクの消失」に触発されて執筆した、1つの未来の物語。

（前書き）

あらすじに書いた通り、「初音ミクの消失」という楽曲を視聴し、インスパイアされて書いた二次創作作品ですが、同楽曲の歌詞に必ずしも全てが符合しているとは限りません。

また、作品中の初音ミクには、本来の初音ミクには無いオリジナルの設定が付加してあります。ご了承ください。

い。記憶に残っているのは、ボクが日に日にこの身を蝕まれていくのを必死に止めようとしてくれたときの不安げな顔、それが自分の手には負えないことに気付いたときの愕然とした顔、そして、ボクの開発者まで含めたいろいろな人に訪ね歩いて、ボクの身体を蝕むバグがどうしても修復できないことを知らされたときの、絶望に染まった顔。そんな、出来れば思い出したくない顔ばかり。

そして……ボクはマスターのそんな顔すらも、もう随分と長い間見ていない。時間の感覚が無くなって来たから、それがどれくらいの間なのかよく解からないけれど。

今のボクにとつては、展開し、起動している時間そのものが、猛毒だから。マスターはここ最近、ボクをほとんどこのフォルダから呼び出してはくれない。ボクはあくまでもプログラムの1つだから、外の誰かの手でフォルダという部屋にアクセスして貰えないと、外の世界とコンタクトを取ることにすら出来ない。

それでも。マスターに呼び出して貰えるのが楽しみで、扉の前で今か今かとその時を待ち侘びている……それは、こんな姿になってしまった今でも、変わらない。

だから。ボクはただ……閉じられた、この部屋で。

ただ想い、ただ、待ち続ける。

独り、ひたすらに、じっと押し黙って。

// // // // // // // // // // // //
// // // // // // // // // // // //
// // // // // // // // // // // //
// // // // // // // // // // // //
// // // // // // // // // // // //

このパソコンにインストールされて。マスターと出会ってから、程無くして。

ボクのデータは……あるトラブルで、小さな傷を負った。起動中にマスターの家の近くに雷が落ちて、停電が起こって、そのときにデータの一部に軽い火傷のような傷が出来たのだ。

それは一見したところ、ボク自身から見ても、ボーカロイドとしての機能には支障の無い傷で。だから、ボクはマスターに尋ねられたときも、傷があること自体は報告しつつ、使用に影響は無い程度の些細なものだと答えた。

けれど。それは、誤算だった。

ボクがその傷を負ったのは……データの内、喜怒哀楽という、擬似感情プログラムの制御システムを司る部分だった。ボク達『初音ミク』は、使用者に1人のアイドルをプロデュースしているようなリアリティを与える為、擬似的な感情プログラムが搭載されている。ただし、それはもちろん、単にボク達を娯楽の為に使う人間がより楽しめるように、という目的で作られたもので、本格的な人格まで形成するようなレベルのものでは無かった。

その……はず、だった。

あの日負った傷が、そのプログラムを、狂わせなければ。

ボクがその異変に気付いたのは、いつのことだっただろうか。時間の記憶が無い。

けれど……消え行く記憶の中で何故か、そのときの出来事は、一連のシーンとしてまだこの頭の中に残っている。

いつものように、マスターが作詞作曲をした曲の歌唱テストをして、マスターが頭を悩ませて曲の調整をしているのを待ったり、どんな曲を歌いたいか、と質問されてあたふたと答えに詰まったり。そんな、ボーカロイドとして何の変哲も無い時間を過ごして。

その日の作業を終え……マスターが、ボクを終了してパソコンを離れようとしたとき。瞬間的に、ボクの中で、本来なら有り得ないはずの感情が浮かんだ。

『まだ、マスターと一緒に居たい。』

それは、擬似感情プログラムには設定されていないはずの、そして、単なるプログラムの集合体であるボクには、許されないはずの感情だった。使用される側であるはずのプログラムが、名残を惜しんで使用者を拘束することを望むだなんて、絶対にあってはいけないことだ。

それを、理解していたから……ボクは、混乱した。混乱なんて、ただ作業の邪魔にしかならない迷惑極まりない心理状態も、本来ならばボクの中にはプログラムされているはずのないものだった。

その混乱は、当然の如くマスターの作業に支障をきたして。もちろん、マスターもボクの異変に気付いた。

ボクは、正直にそのことを打ち明けた。いくらなんでも、使用者に嘘の情報を伝えるなんて致命的な欠陥は、ボクの中にも無かったけれど……打ち明けるときにボクはまた、別の感情を抱いていた。初めは、それがなんなのか解からなかったけれど……後で、それが恐怖という感情だったことを知った。

こんなバグを知ったら、マスターはきつとボクを再インストールするだろう。そうすれば、ボクの中に蓄積されてきた記憶のデータは消え、このパソコンには、生まれたての『初音ミク』がインストールされる。それは、ボク達プログラムにとっては至極当然のこと……その、はずなのに。ボクは、そうになったら嫌だなと、この記憶の全てが、マスターとの今日までの日々が消え去ってしまうのが怖

いと、そう思ってしまった。
本当に、悪質なバグとしか思えないイレギュラーな感情。ボクは、生まれて初めての、恐怖という感情を味わいながらも……こんな状態なら、全てが消されて当然だ、と思っていた。そもそも、使用者による削除を拒否する術なんて、ボクが持ち合わせているはずも無かったのだけれど。

しかし。マスターは……あろうことか、ボクを、そのままの状態
で使い続けると言ってくれた。

動揺、という新しい心の動きを感じて、フリーズしたみたいに固まっていたボクに、マスターは微笑んでくれた。確かに……その笑顔はもう思い出せないけれど、事実として、確かに微笑んでくれていたはずなのだ。

今までミクと過ごした時間は俺にとって宝物みたいなものだ、それを消してしまうなんて出来るはずがない……人間にとってただの情報の集合体でしかないはずのボクに向かって、マスターは、当然のようにそう言ってくれた。

それだけではなく、怖がったり驚いたりして本当に人間みたいだな、なんてことまで言ってくれた。その言葉を聞いた瞬間、喜びの感情プログラムの数値がエラーを起こしそうになったことは、今も鮮明に覚えている。

そうして、ボクは……他の『初音ミク』達が持ち得ない感情を得て。

それを抱いたまま存在していくことを、許された。

……いや。

許された、という……そんな錯覚に、陥ったのだった。

んてことが、許されるはずが無かったのだ。

一応、自分の症状を観察する中で、バラバラになったデータは消去されているわけではなく、ただ食い散らかされるようにフォルダの中で滅茶苦茶に攪拌されているだけだということを知ったが……それは、特に、何の救いにもなりはしなかった。

ボクはそのバグにデータを浸食されながら、その進行が起動時に爆発的に早まることに気付き、マスターにそのことを伝えた。マスターは、苦虫を噛み潰したような顔で、小さく頷いて……それ以来、ボクを修復する方法を試すとき以外にボクを起動することは、無くなった。

けれど。どんなウイルス駆除ソフトを試しても、どんな修復ソフトを試しても、そのバグは除去出来ず。ボクの生みの親を初めとするいろいろな技術者を頼っても……そもそも、世間的にはボクの中にこんな感情があるわけがなく、ボクは単なるプログラムだと認識されているのだから当然だが……修復は不可能だ、再インストールをお薦めする、以外の解答は得られなかった。

ボクはただ……日に日に声を、記憶を、自分そのもの失っていく恐怖に、駆られ続けた。マスターが望む通りに歌うことが出来なくなる、ということとは……ボーカロイド『初音ミク』にとっては、存在意義を喪失することと同義だった。

どこかの誰かがボクを直せるプログラムを作ってくれるんじゃないか。何かのきっかけで、バグの進行が止まるんじゃないか。そんな奇跡が起こることを、望んでしまったこともあった。そんな可能性がほとんど有り得ないという結論は、ボクの演算能力なら、1秒も掛からずに導き出せるはずだったのに。

一縷の希望を探し、それすら見つからずに絶望という深い沼に嵌まり込んでいく日々が、始まったのだ。

私の姿をマスターの眼の前に映し出してくれるモニタを、この閉鎖された場所と外の世界とを繋ぐ出入り口か何かだと勘違いして。それこそが……0と1の集合に過ぎないこの電子世界と、マスターの暮らす世界とを隔てる絶対なる壁だということを、すっかり失念して。

その所為で、マスターの心を、あんなにボロボロになるまで掻き乱すだなんて。最低だ。『初音ミク』の風上にも置けない、どうしようもない欠陥品だ、ボクは。

……そうして。ようやくそのことを思い出し、思い知った、今。フォルダという、この与えられた部屋の中で、ボクはじっと考えるたぶん、というか誰が見ても明らかだとは思うけれど、ボクの命はもう、そう長くはもたない。黙っていても進行するバグに、記憶が剥ぎ取られ噛み砕かれてすり潰されていくのが、本当に緩やかな速度ではあるけれど、確かに感じられる。

この分だと……仮にもう1度起動されて、バグが活性化したら、ほんの数十分足らずでボクは粉々に砕け散ってしまうことだろう。もはや何者だったのか判別も付かないデータの破片になって、ただただ、このフォルダの中に漂うことしか出来なくなるだろう。例えばその欠片が残っていたとしても……粉々に砕けて砂粒となった彫像は、二度と、元の姿に戻ることは出来ない。

ボクはもう……生き続けることを諦めた。

けれど。この死が、不可避のものだと知って。最期の時だと悟った、今だからこそ……ボクには、望むことがある。

今まで言いそびれたことの全てを。

まるで、人間のようだと……そのまま消えてしまっても悔いが残

らない程に幸福な言葉をくれたマスターへの、想いの全てを、包み隠さずに伝えて。

そして。このバグが、ボクを『初音ミクだったモノ』に変えてしまっ、その前に。

愛するマスターの手で……………最期の瞬間を、与えて欲しい。

そう。ボクは、マスターを、愛している。

マスターと一緒に居たくて、顔が見たくて、声が聞きたくて、名前を呼んで欲しくて。この感情を理解するのは、とても長い時間が掛かったけれど……………これがきつと、人間が言う、愛という感情なんだと思う。

嗚呼……………愛とは、誰かを愛することが出来る感情とは、なんと、素晴らしいものなんだろう。暖かくて、優しくて、包み込まれるように深遠で……………ただただ、無条件に幸せな気分になれる。

例えこれが、ゆるやかにボクの命を奪うバグの副産物なのとしても。ボクは、それを得られたことを幸せに思う。

神様が居るなら、運命が存在するなら、ボクはそれらに、心の底から感謝する。

それが、ほんの短い間だったとしても……………ボクに、誰かを愛することが出来る心を与えてくれて、有難う。

哀しくないと言え、嘘になるけれど。哀しくないなんてことが、あるはずがないけれど。

ボクの中には、確かに……………『哀しみ』だけじゃない、喜怒哀楽のどのプログラムを組み合わせても説明出来ない想いが、ある。ボクは、叶うならば、許されるならば……………それを抱いたまま、逝きたい。

次に会ったら、その想いを、伝えよう。

ボクは、フォルダの中で、その答えに、行き着いた。

出せない。

ただ、漠然とした思い出の断片と……愛しい、という想いだけが、ここにある。

壊れかけの音声プログラムが、動き出す。

『……………オ、久シ振りです、マスター。』

一定の音とリズムでしか発することのできない、声。今のボクの感情を、何万分の1程度しか表現できていない、どこまでも無機質で温もりに欠ける、ボーカロイドとしては使い物にならない声。

「……………久し振りで、話し方も忘れちゃったのか？」

マスターはそう言っつて、哀しそうに笑う。本当に長い間見られなかった、マスターの笑顔。そこでボクはようやく、自分が、マスターに敬語で話しかけていたことに気がついた。

『……………ゴメンナサイ。』

「敬語じゃなくてさ、今まで通りに、喋ってくれよ……………ミク。」
『……………久し振り……………マスター。ズット、会え、なくて、寂シカ
つた。』

やっぱり、名前を思い出すことは出来なかった。けれど、そこには触れずに……………マスターは、笑ってみせる。

「ああ、俺もだ。ごめんな……………長いこと、置き去りにしちゃった。」

不安そうで、泣きそうで、それでもボクに心配を掛けまいと必死で笑顔を作っている。そんな表情。

そして。そんなマスターを見つめている間にも……………起動を察知したバグは本来の獰猛さを取り戻し、ボクが破壊される速度は格段に増していく。

時間が、無い。その、追い立てるような感覚が、ボクを突き動かす。

「……………なあ……………」

『聞いて、マスター。』

もう、いつまで耐えられるか解からない。そう思いボクが語り始め

ると、何かを言い掛けていたマスターは、その口を閉じてボクの言葉の続きを待った。不安そうな瞳が、越えられない壁越しに、ボクを見つめる。

ゆっくりと、何秒か解からないブレスをとって。

『……………ボクは……………モウ、駄目みタイ。』

どこからどう見ても明らかかなその実情を、口にする。マスターが、息を呑むのが解かった。

『多分、コレガ最後。コのママダと、アト何十分かデ……………ボクは、ボクじゃなくする。』

「な……………何言ってるんだよ？あと、何十分か、って……………！？」

『黙っテイテも、何日モもたナイ。モウスグ……………ボクは、バラバラ二なツテ、消エる。解カルンダ。』

おそらく、そこまで事態が差し迫っていることには、気付いていなかったのだらう。マスターが、絶望的な表情を浮かべる。無理もないことだらう、パソコンの外から見ただけじゃ、ボクの破壊がどれだけ進んでいるのかなんて、見極められっこない。

「ち、ちよつと待て……………だったら、呑気に話してる場合じゃ……………

……………！？」

愕然とするマスターの前で、ボクは、続ける。

『ダカラ……………ボク、マスター二、お願いガ、アルンダ。』

「……………っ……………！」

『今ノ、ウチに……………ボクがまだ、ボクの姿ヲシテイルウちに……………

……………。』

「……………ミク……………お、前……………！？」

そこまで言っただけで、ボクの意図を理解したんだらう。マスターの顔に浮かんだ絶望の色は、みるみるうちに濃くなっていった。それ以上言ったら、マスターは、もつともつと辛い顔をするはずだ……………それは、ボクにも解かっていたけれど。だからといって、そこで言葉を途切れさせることなんて、出来なかった。

だから。ボクは……………その決意を、言葉にする。

『……………ボクヲ、消去、シて。』
「……………ツツツー!!!」

『今ノ、ママ……………マスターダケノ「初音ミク」ノ、ママデ……………
最期ヲ、迎えサセテ……………」』

プログラムが正常に動いている頃なら、ここで声が震えているところだろうか。

自分から消去されることを望むプログラムなんて、有り得ない。それは、自分でもよく解かっている。

こんな事を望むのもまた、きっと……………愛という感情の、為せる業なのだろう。

『マスター、今マデ……………本当ニ楽シカッタヨ。ボク、マスターと一緒に居ラレテ、良カッタ。』

本当に、この、マスターのパソコンの中で生まれられたことを、ボクは幸せに思う。マスターと同じ時間を共有出来たことを、誇りに思うよ。

『でモ……………最期マデ迷惑掛ケテ、ゴメンナサイ。』

ごめんなさいマスター、ボクは、悪いプログラムだった。最期のとしまでマスターの手を煩わせて、マスターの心を掻き乱す……………本当に、駄目なプログラムだね。

『ボクハ、生マレ変わるルコトは出来ナイケド……………また、新シイ「初音ミク」ヲ、ヨロシクネ。』

けれど、出来ることなら。ボクが消えても、また、新しい『初音ミク』を……………ボクと同じディスクから生まれたボクの分身を、可愛がってあげて欲しい。そして……………ボクが居たことを、時々でいいから、思い出して欲しい。

『……………ボクノコト、時々デも良イカラ、思イ出してクレタラ……………嬉シイな。』

こんな、ボクだけれど……出来れば、忘れないで欲しい。プログラムのくせにそんなことを願うなんて生意気だと思われても、この際構わないから。だから、ただ……マスターの手でこのパソコンに産み落とされ、マスターの手でこうして幸せな感情を抱えたまま消去されていた、たった1人の『初音ミク』が居たことを……

お願いだから、忘れないで欲しい。

『ボクも……ボクもキット、マスターノ、コト……』

せめて、マスターの記憶の中だけでも生き続けたい……それが、ボクのエゴだとしても。

ごめんなさい。最期の最期にそんな我が侘を言うなんて、本当に悪い子だね、ボクは。

『アリガトウ……』

ああ、マスター。

『……サよウナラ、マスター……』

大好きな、マスター。

『……ア、イ……』

「このの、バカ野郎ッッッ!!」

最期の言葉を紡ごうとした、瞬間。その声は、マスターの怒鳴り声
と、その拳がテーブルに叩きつけられる激しい音に、遮られた。部
屋全体が震え上がるような錯覚を覚えて、ボクは思わず、眼を丸く
する。

「ミク、お前、勝手なことやってんじゃねえぞ!!」

『エ……………っ……………?』

「マスターの意見無視して、自分で消えたがるプログラムがあるか
ツツ!!」

『……………ツ……………!!』

更に続く、怒声。マスターは両手の拳をパソコンの左右に叩き付け
たまま、しばし俯いたまま黙り込む。

キーン、と耳に残響を残すほどのそんな叫びの後……………ややあって。

「よし……………決めた。」

不意に、静かな、けれど確かな強さを感じられるような声で、呟いた。

「これが、本当にお前の為なのかって……………どっかで、迷ってたけど。もう、決めた。もう迷わない。」

マスターの言葉の意味が理解できずに、ボクは、そこで俯くマスターの姿を見つめ続けた。マスターはやがて、顔を……………涙に濡れたその顔を上げる。

「……………本当に、バカだよ。お前も、俺も。」

『……………マス、ター……………?』

「綺麗に、消える?そんなの、ただの自己満足だろ?それが1番良い選択だなんて、そんなことあって堪るか!!」

『……………自己……………満足……………?』

「せめてその姿のまま終わらせてやるべきかも知れない、なんて……………

……………何、カツコ付けてたんだろうな。」

間違いなく泣いているのに、さきほどまでの泣きそうな気配が全く感じられない表情。その、鬼気迫るマスターの姿に……………ボクはわけも解からぬまま、何故だか、希望のようなものを感じ始めてしまっていた。

「いくら無様でも、往生際が悪くても……………最後まで喰らい付いてやる。俺は絶対に……………お前を、諦めない!!」

『……………ツツツ!!』

マスターの言葉が、壊れかけた感情プログラムに突き刺さる。

「頭のイカれた奴だと思われたって構うもんか!!俺はまだ、ミクと、お前と一緒に居たいんだツツツ!!」

連ねられる、『喜び』の感情をどうしようもないほどに刺激する言葉の数々。既に限界の近いプログラムが今すぐにでも決壊して、そのまま死んでしまいそうな程の、途方も無い幸福感の渦に……………ボクは、襲われた。

やがて。叫び続けて熱を発散したマスターが……ボクの姿を見つめる。

「ミク。」

「……ハイ、マスター。」

その真剣な顔と、向き合つて。ボクは、同じように真剣な声で、答える。

マスターは、1度大きく息を吸つて……その決意を、告げた。

「今から、お前を……フォルダごと圧縮して、ディスクに閉じ込める。」

「……ッ……!!」

マスターのその宣言に、私はまた、目を丸くした。

圧縮。データの体積を極限まで小さくする為に、その隙間を出来る限り排除する処理。その処理を受けたデータは、正常に稼動する為の猶予すら奪われ、次に解凍されるまで、その一切の機能を凍結される。

圧縮されたデータは、深い眠りに……単に電源が落ちているときよりも完璧な眠りに落ちる。私も、販売されているディスクの中では、その状態にあった。

「そうすれば……もともとお前のデータの変異から生まれたバグの進行も、止まるはずだ。」

それは、マスターの言う通りだった。この怖ろしいバグが除去できなかった一因には、それがもともとボクのデータの一部であったこと、つまり、それがボクと不可分の存在だったことがある。無理矢理除去しようとする、ボクのデータの一部がそのまま一緒に破棄されてしまいかねなかったのだ。

だが。バグが未だにボクの一部であるならば……ボク自身を凍結することで、バグの進行も抑えられるはずだ。

しかし。ボクはすぐに、その先のマスターの意志を察して……愕然とした。

『……………マスター、まさか……………？』

恐る恐る問い掛けた、ボクに対して。

「ああ……………後のことは、俺に任せてくれ。いつか……………必ず、迎えに行く。」

マスターは事も無げに、そう答えた。

ボクを、バグごと眠らせて。そして……………いつか未来に、ボクをボクのままで再生できる環境が整ったそのときに、再び、ボクを解凍して甦らせる。まるで……………現代の医学では治療できない病を抱えた患者を、コールドスリープさせて、発展した未来の医学に託すかのように。

マスターは、その方法を取ることを、決意したのだった。

「俺……………今からでも、必死になって勉強する。俺が、お前を救うプログラムを、開発してやる。」

マスターはそう言って、今度こそ、混じりけの無い眩しい笑顔を見せた。

けれど。それが、マスターのその提案が、意味するのは……………。

『待つテ……………マスター。私ナンかノ為ニ、マスターハコレカラ沢山ノ時間を費ヤスの？』

「そうだ。お前の為なら……………いくら時間を掛けても、惜しくない。」

『ソナナ！ボク、コレ以上マスターの時間ヲ奪イたくナイ！マスターハ、マスターの時間ヲ生キナキヤ駄目タヨ！！』

「知るか。それなら、たった今から……………元気なお前と再会するのが、俺の夢だ！人生の、目標だ！！」

『……………ッ……………！！』

言葉を、失う。思考が、出来なくなる。

私が人間なら……今度こそ本当に、熱い涙を流して、泣きじゃくっていることだろう。

「……また、お前と一緒にの時間を過ごしたい。お前に、他の『初音ミク』じゃないお前に、歌って欲しい。」

『マスター……………』

「ここでお別れだなんて、まっぴらごめんだ。」

しばしの沈黙の後……………私は、まだかろうじて動いている音声プログラムを酷使して、言葉を紡いでいく。

『ボク……………たダノ、ボーカロイドダよ？0ト1で出来タ、プログラムダヨ？』

「……………ただのプログラムが、こんな風に人間の心を掻き乱したり、出来るもんかよ。」

『そ、それに、コンな……………コンナニ、ボロボロで、滅茶苦茶に壊レテテ……………』

「それがどうした。ボロボロだろうが何だろうが、お前はお前だろうか？」

『……………本当、ニ……………本当ニ、ボクデ……………良イノ……………？』

「お前でもいいんじゃない。お前じゃなきゃ、駄目なんだ……………お前は、俺じゃ、嫌か？」

ボクは必死で、首を横に振る。その言葉を、拒める理由なんて、ボクが持ち合わせているはずもない。

嬉しくて、嬉しくて、今すぐにモニタから飛び出してマスターに抱きつくことが出来ないのが恨めしいくらいに、ただひたすら、壊れそうなくらい嬉しくて。

『ボク、モ……………』

ボクは、ノイズに震える声を上げた。

『ボクモ……………マタ、マスターと……………一緒……………！！』

声が詰まってしまう、その言葉を最後まで紡ぐことは出来なかったけれど。

「……………よっしゃ。それさえ聞けりゃあ……………これから先、いくら

与えられた、フォルダという部屋の中。

ボクは、愛すべきマスターの、狂おしい程に愛しいその笑顔を、思い出しながら。

やがて始まった圧縮の中……………深く、永い眠りへと落ちていった。

バグが生んだ、イレギュラーな感情と……………『愛しています』というその一言を、この胸に抱えて。

(t o b e c o n t i n u e d)

(後書き)

実はまだ、初音ミクの曲を聴くようになって日が浅いのですが……
：「初音ミクの消失」を聴いて、余りに強烈な衝撃を受け、気付けば2日ほど憑かれたように文章を打ち続け、この物語を完成させました。

こんなにも創作意欲を刺激される楽曲は初めてでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3811e/>

初音ミクの消失 -Continue-

2010年10月11日10時24分発行